様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2005～2008
課題番号：17390575
研究課題名（和文）地域母子保健活動としての育児支援システム構築の試み

研究課題名（英文）A trial to the promoting support system for maternity and child health service

研究代表者
江守　陽子（EMORI YOKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：70114337

研究成果の概要:
出産後の母親の育児不安軽減を目的に、出産後～12 週の間の母親の育児不安や心配の時系列的変化、母親のニーズに合致した訪問時期および家庭訪問のアウトカムを検討した。
結果 1. 家庭訪問は母親の不安を軽減した。
結果 2. 家庭訪問の適切な実施時期として、初産の母親は新生児早期と乳児期早期、経産の母親は新生児期後半～乳児早期と考えられた。また、母乳や乳房のトラブルに関しての心配や不安の軽減には、生後 2～3 週の新生児期早期が適切である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	5,100,000	0	5,100,000
2006 年度	4,200,000	0	4,200,000
2007 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総　計	14,900,000	1,680,000	16,580,000

研究分野:医歯薬学
科研費の分科・細目:臨床看護学
キーワード:母子保健，育児支援，支援システム，新生児訪問事業，家庭訪問

１．研究開始当初の背景

David Olds（2000）は、若年、低収入、低学歴、未婚といったハイリスクの母親に対し、通常のサービスを受けるもの（対象群）と看護職の自宅訪問を受けるもの（援助群）をランダムに割り当て、子どもの事故発生、救急病院受診回数、虐待の発生を比較し、援助群で良好な結果を得たと報告している。

わが国の妊産婦に対する家庭訪問指導の効果については、具体的な指標を用いての評価はこれまでされてこなかったが、欧米では自宅訪問、多様素援助、ソーシャルサポート、メディア、家族保護サービス、家族訓練などの援助方法についてランダム化比較テスト

が行なわれ、メタ・アナリシスがなされている。その結果、自宅訪問については出生以前からのもの、2 年以上の長期のもの、看護専門職によるもの、12 回以上の訪問回数などの方法で有効な成績が得られている。

わが国の母子保健事業としては、新生児訪問を主体とした看護職の家庭訪問が初産婦に対して産褥 4 週ごろに 1 回程度行なわれているが、その outcome 評価、訪問形態の妥当性についてはこれまできちんと検討されてこなかった。

２．研究の目的

質の高い母子の健康支援システム整備のために、母子保健事業の一つである新生児訪問指導を見直し、効果的かつ経済効率のよい育児支援システムを強化・再構築するための、現状分析と実証研究を推し進める。具体的には、わが国における新生児訪問事業の実態を明らかにし、育児支援の見地から捉えた問題点を抽出するとともに、受け手である母親側の満足度、outcome 評価、訪問指導条件を統制することによって効果を比較し、低マンパワーでも成果を得やすい新システム構築の可能性を探る。

３．研究の方法

Ｉ県下の新生児訪問指導の実態調査を行う。

(1) 新生児訪問指導事業実施主体である83市町村に対する郵送による質問紙調査

(2) 看護専門職による訪問指導の outcome 評価のための条件設定を行う

①訪問指導の最適形態（訪問時期、訪問回数）を検討する

②家庭訪問の効果の評価時期を決定する

４．研究成果

(1) 家庭訪問の効果として、家族の情緒的サポートよりも、より母親の不安の軽減に影響を与えていた。

(2) 家庭訪問の適切な実施時期として、初産の母親は新生児早期と乳児期早期の 2 時点であり、経産の母親は新生児期の後半～乳児早期、ただし、母乳や乳房のトラブルに関しての心配や不安は、生後 2～3 週の新生児期早期と考えられた。

(3) 4･5 か月時における家庭訪問のアウトカム評価からは、初産は乳児期早期、経産は乳児期後期に実施した家庭訪問の効果が高かったことが示された。

(4) 家庭訪問のアウトカムを母乳栄養の確立にした場合には、新生児期に訪問を受けていた母親でその効果が評価されていた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 13 件）

1. A.Kawano, S.Miyagawa, Y.Emori : Association between stress-related substances in saliva and immune substances in breast milk in puerperae. Biological Research for Nursing. 2009：25(1):58～66、査読有

2. 川野亜津子、江守陽子、宮川幸代: 母乳中免疫物質と母親のストレスとの関連に関する文献検討、母性衛生、2008：49（4）：531～541、査読有

3. 川野亜津子、江守陽子、宮川幸代: POMS（Profile of Mood States）による産後の母親の心理状態と唾液中SIgA、cortisol濃度との関連：日本助産学会誌、2008：22（1）：17～24、査読有

4. 江守陽子、橋本美幸： A県における新生児訪問指導担当職員の現況について 母性衛生、2008：49（2）：531～541、査読有

5. Naomi Kano, Koichi Iwai, Yoko Emori, Yoko Kajihara, Chihoko Sankai and Chiori Shimada : Influences of exposure to violence on health status and acceptance of pregnancy in pregnant women Health Sciences、2008:24(2)：153～168、 査読有

6. 橋本美幸、江守陽子： 効果的な家庭訪問指導を目的とした訪問指導時期の検討－出産後～12 週までの母親の育児不安軽減の観点から 小児保健研究、2008：67（1）：47～56、 査読有

7. 野々山未希子、江守陽子、永井 泰、小笠原加代子、加藤季子：10 代女性のSTI感染とその影響要因 母性衛生、2008：48（4）：531～541、査読有

8. 村井文江、斉藤早香枝、野々山未希子、江守陽子、谷川裕子：UNICEF /WHOの「母乳育児成功のための 10 か条」の視点からみた関東６県における母乳育児の状況 ―第２報 母乳育児支援と母乳育児率の関連― 母性衛生、2008：48（4）：505～513、査読有

9. 村井文江、江守陽子、斉藤早香枝、野々山未希子、谷川裕子：UNICEF /WHOの「母乳育児成功のための 10 か条」の視点からみた関東６県における母乳育児の状況 ―第１報 母乳育児支援の現状― 母性衛生、2008：48（4）：496～504、査読有

10. 橋本 美幸、江守 陽子： 市町村の母子保健サービスとしての新生児訪問指導事業の現状と課題 母性衛生、2007：48（2）：262～270、査読有

11. Yoko Emori：Coping Behavior for Labor Pain in Pregnant Japanese Women Primary Care Japan, 2006: 4(1): 23～29, 査読有

12. 橋本 美幸、江守 陽子：医療人類学的アプローチによる伝統的子育て支援ネットワークと近代的子育て支援ネットワークの比較研究 母性衛生、2006；47（1）：125～133、査読有

13. 江守陽子、野口恭子、石井トク：わが国の妊産婦ケア施設における病棟編成および分娩介助者の職種からみたケアの実態 母性衛生、2006：47（1）：34～45、査読有

〔学会発表〕（計７件）

1. 斉藤早香枝・江守陽子・村井文江: 産後の生活の実際とサポート状況、育児不安、抑うつとの関連 第 49 回日本母性衛生学会 2008 年 11 月 7 日：千葉県浦安市

2. 橋本美幸、江守陽子： 出産後～12 週の母親の育児不安と具体的な心配事の時期別検討 －効果的な指導内容の検討を目的として－ 第 49 回日本小児保健学会 2008 年 9 月 27 日 札幌市

3. Saitoh, Sakae, Emori, Yoko, Murai, Fumie, Nonoyama, Mikiko, Hirose, Taiko, Kusanagi, Miho: Factors influencing a father’s child-rearing of a low birth weight infant. The 11th World Congress of World Association for Infant Mental Health,

3, August, 2008, Yokohama

4. 斉藤早香枝、村井文江、江守陽子、野々山未希子： 早産・低出生体重児の母親の被養育体験と育児困難感との関連
第 48 回日本母性衛生学会　2007 年 10 月 11 日　茨城県つくば市

5. 斉藤早香枝、江守陽子、村井文江、野々山未希子： 早産・低出生体重児を養育する母親の育児困難感とその関連要因について
第 48 回日本母性衛生学会　2007 年 10 月 11 日　茨城県つくば市

6.　川野亜津子・宮川幸代・江守陽子: 唾液中ストレス物質と母乳中免疫物質の関連
第 30 回プライマリケア学会　2007 年 5 月 26 日：宮崎県宮崎市

7.　橋本美幸、江守陽子： 産後 2～12 週までの間の 4 時点における母親の育児不安の内容とその程度の違い　－初産婦と経産婦の比較検討－ 第 21 回日本助産学会学術集会収録集、p. 72：　2007 年 3 月 10 日：大分県別府市

〔図書〕（計 3 件）
1. 助産学講座 第 7 巻　助産診断・技術学Ⅱ　［2］分娩期・産褥期　医学書院、166-189、2007　堀内茂子編集（共著者：堀内茂子、江守陽子、毛利多恵子、森明子、有森直子、川島広江、野田洋子、茅島江子、高田昌代、野口真弓）

2. 助産学講座 第 5 巻　助産診断・技術学Ⅰ　医学書院、 338-360、2007　下部山キヨ子、武谷雄二編集（共著者：下部山キヨ子、武谷雄二、江守陽子、正岡経子、石村由利子、村山陵子、松崎政代,中嶋文子,丸山知子、河野洋子、岡島文恵、佐世正勝）

3. 臨床助産師必携　生命と文化をふまえた支援　医学書院、第 2 版　28-33、323-358、2006　　我部山キヨ子編集（共著者：江守陽子、安藤広子、井上京子、今関節子、大石時子、他）

６．研究組織
(1)研究代表者
江守　陽子（EMORI YOKO）
筑波大学･大学院人間総合科学研究科･教授
研究者番号：70114337
(2)研究分担者
村井　文江（MURAI HUMIE）
筑波大学･大学院人間総合科学研究科･准教授
研究者番号：40229943
斉藤　早香枝（SAITO SAKAE）
筑波大学･大学院人間総合科学研究科･講師
研究者番号：50301916